慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	セルフ・ヘルプ・グループのEmpowerment機能に関する研究： 精神障害回復者クラブとそのメンバーのEmpowermentに関する評定研究
Sub Title	
Author	三島, 一郎(Mishima, Ichiro)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1999
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.50 (1999.) ,p.38- 42
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学事報告：学位授与者氏名及び論文題目：博士
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000050-0038

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

用薬の強化効果

第958号　新山　紀子　児童期における今日的課題に関する1研究
—いじめ・不登校に対する意識の変化—

第959号　石井　　拓　デンショバトにおける強化遅延中の選好逆転現象についての研究

教育学修士（教育学専攻のもの）

第960号　番匠　洋一　C. R. ロジャーズの思想形成過程における「教育」の構想について

第961号　垣花真一郎　「日本語話者の音韻構造と英語単語の読みの習得について」

第962号　藤井　良隆　私が他者を記述する際に，私が投影する感情を相手が抱いているかどうかを判断するものは何か
～トーマス・H・オグデンの投影同一化理論をふまえて～

第963号　神原　成之　数学教育に生かす数学の歴史
—数学の歴史が高等学校における数学教育に寄与する可能性を探る—

第964号　吉田多美子　教師の文学教育における信念と，その授業行動への影響
—中2教材“夏の葬列”における検討—

第965号　吉野　剛弘　明治35年から40年の旧制高等学校入試における全国総合選抜制度に関する考察

第966号　松永麻也子　新入学児の適応過程
—配慮を要する児童の事例から—

第967号　岡本　　聡　『人間性と行為』におけるデューイ「習慣」概念の教育的意義
—コンテクスト，個性，行為と思考—

第968号　飯高　晶子　子どもの経済世界
—価格の概念と経済的推論—

博　士（平成11年度）
社会学博士（平成11年7月14日）

甲　第1758号　三島　一郎

セルフ・ヘルプ・グループのEmpowerment機能に関する研究
—精神障害回復者クラブとそのメンバーのEmpowermentに関する評定研究—

〔論文審査担当者〕

主査　慶應義塾大学文学部教授・
大学院社会学研究科委員
文学修士　山本　和郎

副査　東京都立大学人文学部教授
社会学修士　久保　紘章

副査　慶應義塾大学総合政策学部教授・
大学院社会学研究科委員
社会学博士　井関　利明

論文審査の要旨

三島一郎君提出の学位請求論文「セルフ・ヘルプ・グループのEmpowerment機能に関する研究-精神障害回復者クラブとそのメンバーのEmpowermentに関する評定研究」は，セルフ・ヘルプ・グループの独自の機能であるEmpowermentの機能を真正面から取り上げ評定研究を行なった研究である。従来のセルフ・ヘルプ・グループの評定研究は医療モデルや心理療法モデルによる評定研究であり，それはセルフ・ヘルプ・グループに参加することでもたらされる成果を評価するという点では意味があったが，セルフ・ヘルプ・グループの本来の効果を評定しているとはいえなかった。本研究は，セルフ・ヘルプ・グループの中核の機能であるEmpowerment機能の評定尺度を作成し評価を行ない，さらにそ

の効果の評定を行なった点で，セルフ・ヘルプ・グループ研究の中で最初の研究である。

本論文の構成は，序論の「研究の目的と意義」，第1章「セルフ・ヘルプ・グループの機能に関する研究」，第2章「精神障害回復者クラブ及びメンバーのEmpowermentに関する評定研究」，第3章「事例研究-日本における精神障害回復者クラブの実際」，第4章「考察と展望」からなっている。

序論「研究の目的と意義」において，まずセルフ・ヘルプ・グループを「ある共通問題に見舞われた個人が(あるいは，その家族が)，自分一人だけでは解決できそうにないその自分の抱える問題の解決のために，あるいは，その問題と共に生きていく力を得ていく為に自発的かつ意図的に組織したグループである。」と定義した。さらにこのグループは，たとえ協力関係はあっても，専門職から独立し，自主的・自律的に運営され，持続的に定期的活動を行なっているグループであり，従来の援助モデルにみられるように，援助の方向が専門職から被援助者に一方向的に固定され「患者であること」「消費者であること」を，被援助者達は専門職との関係の中で強制されてきた専門職中心のヒューマン・サービスの在り方に変更を求め，全く新しい当事者（被援助者）中心のヒューマン・サービスの在り方を再構成していく可能性を持ったグループ活動と考えている。その意味で，セルフ・ヘルプ・グループ活動とその機能を考えることは，21世紀のヒューマン・サービスを展望することになり，同時に新たな当事者と専門職との関係を模索していくことにつながる，と筆者は考える。

本研究の目的は，セルフ・ヘルプ・グループの独自の機能のひとつであるEmpowermentについて，精神障害回復者クラブとそのメンバーを対象に，評定研究を行なうことである。ここでいう独自の機能のひとつであるEmpowermentとは「個人・組織・コミュニティの3層にわたり，自らの生活に統制（コントロール）と意味を見出すことで力を獲得するプロセスである。」と定義し，個人・組織・コミュニティの3層にわたり相互促進的に発展するもので，①個人レベルでは，無力な状態から，認知・行動・情動面に変化を生じ，生活に統制と意味を見出すことで実現され，②組織レベルでは，コミュニティの感覚がグループの中で形成されていくことで発現し，③コミュニティ・レベルでは，対社会的にも影響を与える運動を展開していくことで実現され得る，と考える。また精神障害回復者クラブとそのメンバーを評定の対象としたのは，精神障害をめぐって，日本の状況の中で，一番端的に社会的価値の引き下げの問題が観察されることと，それだけに，この領域のセルフ・ヘルプ・グループは，戦略的にEmpowermentの問題に切実に取り組んでいることであろうことが予想されたからである。

本研究の進め方は，まずセルフ・ヘルプ・グループの機能に関する文献研究を行なって，セルフ・ヘルプ・グループの機能について理論的な整理を行ない，Empowermentがセルフ・ヘルプ・グループの中心的機能であることを確認し，それを評定することの意味を明確にする。次に，セルフ・ヘルプ・グループの持つひとつの機能であるEmpowermentの評定を行なう。評定研究の第1研究では，精神障害回復者クラブのメンバーがどのように自らのセルフ・ヘルプ・グループの体験を意味づけているのかを抽出する。第2研究では，第1研究で得られたメンバーの体験の記述そのものの中から，セルフ・ヘルプ・グループの持つEmpowerment能力評定尺度を開発する。第3研究ではSegal, Silverman, Temkin (1995)が開発した，重篤な障害者を持つメンバーにより運営されるセルフ・ヘルプ・グループへの参加の効果としてのEmpowerment獲得評定尺度の日本語版を作成する。第4研究では第2，第3研究で開発された尺度を用いて，セルフ・ヘルプ・グループのメンバーの体験的能力感と実際のEmpowermentの獲得の関係を検討する。さらに第2章では，第2研究で得られた量的データに事例研究で得た質的情報も併せて，セルフ・ヘルプ・グループがEmpowermentを獲得するための条件を考察する。

第1章「セルフ・ヘルプ・グループの機能の研究」では，セルフ・ヘルプ・グループの機能についての論議をまとめ，代表的な機能として，(1) グループ・プロセス，(2) イデオロギー，(3) ヘルパー・セラピー原則，(4) 体験的知識，(5) 専門的援助に対する批判的役割，(6) グループ・ダイナミクス，(7) Empowerment（力の獲得）を上げている。その中でとりわけセルフ・ヘルプ・グループの機能の中心にEmpowerment機能を据える理由としては，グループのメンバーが具体的に生きていく力をセルフ・ヘルプ・グループの活動の中で獲得していくことが中心的な活動の眼目となっているからであり，それ故，Empowermentをセルフ・ヘルプ・グループの機能の中心に据えることは，セルフ・ヘルプ・グループの機能の中核を扱う事になると筆者は考える。

このEmpowermentは，個人・組織・コミュニティの3層にわたり，自らの生活に統制（コントロール）と

意味を見出すことで，力を獲得するプロセスである。各レベルでの力の獲得内容を見てみると，①個人レベルでは，統制，生活に意味を見出す，必要な資源の獲得，対処能力の開発，自己概念の向上，体験的知識の利用，自己説得のプロセス，新たな自己・新たなアイデンティティの獲得，自己効力感の向上，，自らに働きかける行動力の強化，自尊心の向上であり，②組織レベルでは，統制，コミュニティの感覚の形成，必要な資源の獲得，対処能力の開発，メンバーの自己概念を引き上げる方法の提供，スティグマの軽減，組織内における管理・運営・サービスの分配に関する統括をメンバーに任せる，モデリング，統制に役立つ新たなヒントを得る場の獲得，体験的知識の交換，自己説得のプロセス，新たな自己像，新たなアイデンティティの獲得に対するグループによる追認，自らと環境に働きかけるメンバーの行動を強化，援助役割の獲得，好んで帰属し得るような仲間集団の獲得，グループ文化の形成，相互支援の展開，援助資源の増大であり，③コミュニティ・レベルでは，統制，対社会的に影響を与える運動の展開，必要な資源の獲得，対処能力の開発，スティグマの軽減，社会政策の立案にメンバーが参加するのを提供する，環境や社会に働きかけるメンバーの行動を強化＝社会変革者，仲間への権利養護のためにグループの文化を社会に代替的な文化（オルタナティブ）として提供しヒューマン・サービスの再編を訴える力ともなること，相互支援の展開，援助資源の増大である。このような力の獲得がセルフ・ヘルプ・グループの機能として存在しているのではないかと，極めて実際的に理論的考察から提言している。

第2章「精神障害回復者クラブ及びメンバーのEmpowermentに関する評定研究」では，まず，第1研究においてセルフ・ヘルプ・グループのメンバーがグループに参加することにより何を体験しているのか，そして，その体験をどのように認知しているのかを抽出した。前章の理論研究からEmpowermentが極めて個人的な概念であることが明らかにされたので，メンバーのグループ内での体験とそれをどう認知しているかを聞くことにした。

方法としては，筆者もかかわっている一つの精神障害回復者クラブの全会員36名にアンケートを発送し，22名より回答を得た。回収率は63%であった。結果については，これまでのセルフ・ヘルプ・グループの機能研究の成果を踏まえ，カテゴリー分けをおこなった。最終的な活動の意味づけは，精神障害回復者クラブのプロジェクト委員の座談会での話し合いを経て行なわれた。この結果，2つの重要な要素が浮かびあがってきた。ひとつが，モデリングであり，もうひとつが，他者の役に立つ体験-傷つき体験・喪失体験が他者の役に立つ，ということであった。

第2研究は第1研究のアンケート調査で得られたメンバーの体験にもとづき，そこからセルフ・ヘルプ・グループのEmpowerment能力評定尺度を開発することを目的にした。方法としては，メンバーの体験記述の中から，筆者のセルフ・ヘルプ・グループの機能に関する理論的研究の成果をも参考にし，セルフ・ヘルプ・グループのEmpowerment機能に関わりがあると思われるものを全てピックアップして，70項目抽出した。項目は，その意味内容が明確になるよう若干の表現上の修正を行なった。さらに，セルフ・ヘルプ・グループの機能研究の成果から，筆者が必要と考える項目を若干加えた。これらの項目が，セルフ・ヘルプ・グループのEmpowerment能力を評定するものとして，内容的にどれだけ妥当であるかについて，セルフ・ヘルプ・グループ研究者・実践家・活動家4名に評定を依頼した。評定に際しては，「妥当である」に3点，「やや問題がある」に2点，「妥当でない」に1点という具合に配点してもらった。最終的に，評定者4名中3名以上が3点を配点した項目だけを内容的妥当性のある項目として，採用した。結果として，30項目が採用された。その内容は「モデリング」(3項目)，「体験の共有」(5項目)，「ヘルパー・セラピー原則」(2項目)，「リフレイミング」(7項目)，「サポート・ネットワークの獲得」(10項目)，「体験的知識の交換」(3項目）であった。

このEmpowerment能力評定尺度と関連項目（媒介変数）として，性別，年齢，グループへの参加期間，グループの開催頻度，グループへの参加頻度，グループのあなたにとっての重要度を聞く質問紙を用意し，都内の14の精神障害回復者クラブのメンバー104名を対象に調査を実施した。有効調査対象数は100名であった。

結果としては，Empowerment能力評定尺度について主成分分析を行なったところ，負荷量平方和における分散の割合は，第1因子で36.4%であり，第2因子5.8%，第3因子5.5%，第4因子5.1%で，第5因子以後は5%以下となり，この尺度は一次元性の高いものであると判断した。また内的整合性を確認するためにChronbachのα係数を算出したところ，.935であった。平行モデルによる信頼係数は.936であり信頼度は十分高いことが確認された。

第3研究はSegal, Silverman, Temkin (1995)が開発

し，重篤な精神障害をもつメンバーにより運営されるセルフ・ヘルプ・グループへの参加の効果をみるものとして作成されたEmpowerment獲得評定尺度の日本語版を作成し，その内的妥当性，尺度としての信頼度を検討する。日本語版の作成に当たっては，Segal, Silverman, Temkin (1995) のEmpowerment獲得評定尺度を翻訳することから着手し，翻訳に当たっては，米国留学経験のある研究者に依頼した。翻訳されてきた尺度を筆者ともう一人のセルフ・ヘルプ・グループの研究者とで検討し，表現の明確化・平易化も同時に図った。Segal, Silverman, Temkin (1995) のEmpowerment獲得評定尺度は，個人レベル，組織レベル，コミュニティ・レベルの3層にわたってEmpowermentを獲得したかを評定できるようになっている。

調査の実施は，第2研究の対象者であった都内の14の精神障害回復者クラブに参加するメンバー104名を調査対象にした。有効調査対象数は，14グループ100名であった。

結果としては，日本語版Empowerment獲得評定尺度の下位尺度ごとの内的整合性についてのChronbachのα係数及び平行モデルによる信頼係数を算出した結果，個人レベルでは，.815, .820, 組織レベルでは.853, .860, コミュニティ・レベルでは.649, .662, の数値を得た。この値はSegal, Silverman, Temkin (1995) の研究結果とも近似しており，コミュニティ・レベルを除いては，この尺度の信頼性は高いとみなすことができる。

第4研究においては，精神障害回復者クラブのメンバーが体験的に持っているEmpowerment能力感が，実際にEmpowermentの獲得につながっているのか検討する。つまり，第2研究で開発されたEmpowerment能力評定尺度の評定結果と第3研究で作成された日本語版Empowerment獲得評定尺度の評定結果との関係を見た。

結果は，Empowerment能力評定尺度の評定結果と日本語版Empowerment獲得評定尺度との相関は.234で5%水準で有意な相関を示した。この結果は，セルフ・ヘルプ・グループのメンバーがEmpowerment能力感をもてば実際にEmpowermentの獲得につながることを示している。このことはセルフ・ヘルプ・グループのEmpowerment機能を実証的に裏付けるものである。さらにEmpowerment能力評定尺度は，日本語版Empowerment評定尺度の下位尺度の組織レベルの尺度と相関が見られた。このことはセルフ・ヘルプ・グループが参加メンバーに組織レベルでのEmpowermentを獲得するための，つまり，コミュニティ感覚の形成，メンバーの自己概念を引き上げる方法の提供，統制に役立つ新たなヒントを得る場の獲得，体験知識の交換，モデリングの場，援助役割の獲得等のEmpowermentを獲得するための場と機会を提供していることを証明している。

第3章「事例研究-日本における精神障害回復者クラブの実際」では，調査対象となった14の精神障害回復者クラブについて事例研究を行ない，評定研究のグループ間比較検討を行なった。さらに第2研究で行なった調査結果と事例研究から得られる質的情報を併せて，Empowermentが獲得されるためのセルフ・ヘルプ・グループが持つべき条件が何か検討した。その結果，セルフ・ヘルプ・グループが持つべき条件として，①メンバーがセルフ・ヘルプ・グループを重要な活動と認識し，自分の所属集団として感じられるような設定にあるか，即ち，メンバーが十分運営参加し，コミットメントできる構造にあるかどうか，②体験を語ることが十分に認められるような構造やプログラムになっているかどうか，③問題を前向きに考える勇気のわくようなモデルが豊富にいるかどうか，④誰にでも話せない病気や薬，病院の話をすることで支えられているかどうか，といった条件が浮き彫りにされた。

第4章「考察と展望」において，本研究から，著者は新たな研究と実践の展望を得た事を述べている。第一には，Empowermentの評定尺度を整えたことで，コミュニティ心理学独自のEmpowermentアプローチの可能性である。尺度評定のデータに基づいて，データ・ベイスド・インターベンションを含んだコンサルテーションがセルフ・ヘルプ・グループに対して展開できる可能性が開けたことである。セルフ・ヘルプ・グループとそのメンバーがよりEmpowermentを獲得していけるために，客観的データを提示しながら話し合い側面から専門的に支援していく道である。第2には，主成分分析の結果より，Empowerment能力評定尺度は一次元性の高い尺度であることが分かったが，Empowerment能力を構成する要素が抽出される可能性が残されている。筆者もバリマックス回転の結果いくつかの意味のある因子を抽出している。更なる研究によってセルフ・ヘルプ・グループのEmpowerment能力を構成する要素を追求することで，理論研究にも大きな貢献をするだろう。第3として，今回の評定研究の結果は，専門職の在り方にも再考を促すものであった。即ち，精神科ソーシャル・ワーカーが関与している精神障害回復者クラブでは，クラブの重要度に対する評点と，体験が分かち合われてい

るという評点が有意に低かった。このことは専門職が関与することのマイナスの側面を示唆しているもので，従来の専門職中心の専門性の在り方に再考を示唆している。

最後に，このセルフ・ヘルプ・グループのEmpowerment機能の評定研究を通して筆者が感じたことは，当事者（被援助者）をクライエントして見るのでなく，援助資源として見る見方が主流をなすのではないか。このことは，相互支援をベースとした人々の力と尊厳に基づく新たな文化の創造に貢献するもので，こうした潮流の中で，従来の専門職中心の専門性の在り方は，変更をもとめられざるを得ないのであり，当事者（被援助者）の生の体験世界の流れを尊重し，彼らのEmpowermentの実現が保障されるような専門職の関与の仕方，そうした意味での役割の変更，ヒューマン・サービス・システムの再編がもとめられている。それは，従来の専門性を捨て，当事者（被援助者）との真の意味でのパートナーシップを基盤に，新たな専門性を構成していく営みの中からしか実現され得ない，と筆者は述べている。

セルフ・ヘルプ・グループに関する研究は，北米では1970年代から急速に進み，精神医療，ソーシャルワーク，保健・看護，心理学などの領域で研究されている。わが国では，80年代から研究者・実践者の間で関心がもたれるようになって，当初は米国の紹介や解説的なものが多かったが，独自の研究もみられるようになった。とくに90年代になると社会福祉，保健・看護，精神医療，心理学などの領域でセルフ・ヘルプ・グループに関連する修士論文もかなりみられるようになった。博士論文では2つほどしかない。このようにわが国で数少ないセルフ・ヘルプ・グループ研究の中で，本論文は，重要な成果として評価される。とくにセルフ・ヘルプ・グループの機能にEmpowermentを取り上げ，その能力と獲得の両面から評定した，実証的に評定研究を行なった論文は日米で始めてのものである。さらにEmpowermentの問題を理論的概念的に論議するだけではなく実証的な研究として展開した点，コミュニティ心理学の研究分野への貢献は大変大きなものがあり，とくに，Empowerment能力評定尺度の開発は，コミュニティ心理学の実践家にとっても大変役に立つ研究である。

このように新しく意欲的な研究論文であるが，Empowermentの概念についての論議のところで，関連分野についてふれてはいるものの，ヒューマン・サービスの提供者と受け手をめぐる関係の再考を問いかける21世紀に向けての重大な鍵概念だけにもっと広い分野の展開を取り上げて欲しかった。また類似の概念を取り上げその対比によってこの概念の特徴を浮き彫りにすれば一層よかったと思われる。さらに，評定研究の結果の提示の仕方に工夫が必要かと思われた。しかし，このような問題は，本論文の，セルフ・ヘルプ・グループ研究の分野で新しい地平を開いた価値をいささかも損なうものではない。残された研究課題は，筆者も触れているように，Empowerment能力の因子構造についてであり，Empowerment概念の精緻な理論化にむけて研究がすすめられることが期待されることと，さらに，本論文では精神障害回復者クラブをとりあげたが，今後，他の領域のセルフ・ヘルプ・グループのEmpowermentに関する評定研究も期待するところである。以上のように今後の課題は残されているものの本論文のセルフ・ヘルプ・グループ研究分野とコミュニティ心理学界への貢献は疑う余地はない。

上記の審査の結果により，本論文は博士（社会学）の学位を受けるに値するものと認められる。

社会学博士（平成12年2月22日）

甲　第1794号　延島　明恵

テレビ広告におけるジェンダー描写とコミュニケーション効果に関する研究

〔論文審査担当者〕

主査　武蔵工業大学環境情報学部教授・
慶應義塾大学名誉教授
Ph. D.　岩男寿美子

副査　慶應義塾大学メディア・
コミュニケーション研究所教授・
大学院社会学研究科委員
文学博士　萩原　滋

副査　関西学院大学社会学部教授・
大学院社会学研究科後期課程指導教授
法学博士　真鍋　一史

論文審査の要旨

延島明恵君提出の学位請求論文「テレビ広告におけるジェンダー描写とコミュニケーション効果に関する研究」は，テレビ広告とジェンダーというわれわれの日常生活と密接な関わりをもつ現象を研究課題として取り上